

「男、突っ走る！」

第14回

第一稿

作・壽倉 雅

1 木内家・全景（夜）

2 同・雅也の部屋

雅也がパソコンで脚本を書いている。

N 「脚本家になると進路変更をした僕は、以前にも増して、執筆活動に力を入れていました」

と、雅也の携帯電話に着信がかかってくる——賢哉からである。

雅也「（電話に出て）もしもし？ 分かった、外で待ってて」

3 同・玄関

ドアを開ける雅也——賢哉が待っている。

賢哉「（袋を渡して）はい、東京土産」

雅也「ありがとう。どうだった、握手会」

賢哉「良かったよ。やっぱり夏休みだと、ゆつくりできて良いな」

雅也「そりゃそうだよ。普通の土日に夜行バ

ス使ってたなら、どうしても学校に行く時間と重なって思うようにならないもんね」

賢哉「まあな」

雅也「（持っていた袋を渡して）はい、俺からも福岡土産」

賢哉「親父のところ行ってきたのか？」

雅也「うん。四日ほど福岡に滞在して、そのあとは広島の実家に行った」

賢哉「随分満喫してるじゃないか」

雅也「たまにはゆっくりしたいからね。久しぶりに福岡や広島に行くと、学校のこととか全部忘れられるから」

賢哉「夏休み前は、大変だったもんな。あれからどうなんだ？ 学校祭の準備」

雅也「何とか進んでる。PR委員会も、一組の女子や四組の男子に振り回されて、一時はどうなるかなとも思ったけど、実際動き出したら、みんなあっさり動いてくれてる」

賢哉「そういうもんだよ。単純なんだから、俺たち高校生っていうものは」

雅也「そうだね」

賢哉「まあ、準備進んでるんだったら安心したわ」

雅也「うん……」

賢哉「どうした？」

雅也「実はさ……俺、生徒会選挙に出ようと思ってる」

賢哉「生徒会？ どうして」

雅也「学校祭の実行委員会やってたら、そういう運営にも興味持っちゃって」

賢哉「脚本の次は生徒会か。お前もすげえな」

雅也「何故だか分からないけど、いろいろとやりたくなっちゃうの」

賢哉「俺はとてそこまで学校生活にスイツチ入らないなあ」

雅也「けど、学校祭二日目の体育祭のほうは、かどけんに頑張ってもらうよ。スポーツ系は、かどけんをはじめ運動経験者の腕にかかってるんだから」

賢哉「はいはい、頑張りますよ」

雅也「じゃ、よろしく」

賢哉「お前も、無理するなよ」

雅也「うん」

賢哉「じゃ、また出校日で」

雅也「じゃあね」

と、去っていく賢哉——見送る雅也。

4 中央高校・全景

5 同・生徒会室

書類を見ながらパソコンで作業をして

いる雅也と真弓。

真弓「ごめんね、夏休みなのに手伝ってもら
って」

雅也「大丈夫。パソコン作業なら任せといて」

真弓「私、二組って実は勝手に苦手意識持っ
てたの」

雅也「どうして？」

真弓「男子が多いから、何だか怖くて。けど、
木内君みたいな子もいるんだって安心した」

雅也「（苦笑して）そりゃ、男子が三十人もいれば、怖いって思うのは当然だよ。それに二組と六組じゃ、なかなか一緒になることもないだろうし。男子校みたいなノリや圧があるから、それに比べたら六組は真面目な男の子が多そうだし、男女比のバランスも良いもんね」

真弓「けど、うちのクラスだって男子と女子の壁は少なからずあるよ。木内君は、そういうのなさそうだね」

雅也「俺は、そういう壁が嫌いな。男子だって女子だって、同じクラスの人間に変わりはないんだもの。変な壁は、壊したほうが良いの」

真弓「木内君にとって、クラスの壁は言わばベルリンの壁ってわけだ」

雅也「ベルリンの壁？」

真弓「崩壊するってこと」

雅也「（笑って）その例えは思いつかなかつたなあ。確かに、そんな壁は壊してしまえ

ば良いってというのが俺の考え」

真弓「今回、実行委員に木内君がいてくれて
本当助かった。体育祭の選手情報入力する
のにパソコン使うんだけど、私たちだけじ
やなかなかね」

雅也「そういえば、生徒会長はどうしてる
の？ 全然姿見せないけど」

真弓「三年生でなおかつ進学クラスだから、
補修授業とかがあつてたまにしか来られな
いの。でも、ちゃんと普段の生徒会の会議
とか朝の挨拶運動とかの仕事はちゃんとし
てくれてる」

雅也「生徒会長やりながら、受験勉強なんて
大変だね」

真弓「木内君は、脚本家になるんでしょう？」

雅也「まあね。今、絶賛原稿執筆中だよ」

真弓「そんな壮大な夢があるなんて、すごい
なあ」

雅也「真弓さんは、進路どうするの？」

真弓「私は、看護学校」

雅也「あれ、吹奏楽は？」

真弓「それは趣味。だから、趣味を本格的に仕事にしようとする木内君の意思がすごいなって思ってる」

雅也「ありがとう」

真弓「学校祭終わったら、みんなで打ち上げやろうね。こういう事務作業で、実行委員を支えてくれてるんだから、木内君は」

雅也「こんなの、パソコンの操作さえ覚えれば誰だってできるようになるさ」

真弓「けど、そんな文字早く打てないし、画面操作だってお手の物じゃない。これは木内君だからできることだよ。自信もってよ」

雅也「俺にしかできないことか……」

真弓「どうしたの？」

雅也「いや……何でもない。（とパソコンの画面を見せて）はい、できたよ」

真弓「ありがとう。これで大分進んだ」

雅也「それは良かった。（と笑って返す）」

雅也が入ってくる——一磨がロッカーの整理をしている。

雅也「あれ、かつちゃんどうしたの？」

一磨「今日、和太鼓部の演奏会があつてさ、

太鼓を学校に戻しに来たついでに寄つたの。

夏休みの宿題で、テキストの回答集、ロッ

カーに置き忘れてたから」

雅也「そっか」

一磨「木内は今日どうしたの？」

雅也「学校祭の準備」

一磨「P R 委員会のほう？」

雅也「違う違う、生徒会の人たちと一緒にや
つてるやつ。P R 委員会は、二期期入つて

からみんなで練習するから」

一磨「大変だね、木内も」

雅也「そんなことないよ」

一磨「じゃ、また新学期にね」

雅也「うん、じゃあね」

と、出ていこうとする一磨。

雅也「あ、かつちゃん。(と呼び止めると)

ちよつと、お願いがあるんだけどさ」

一磨「何？」

雅也「俺、後期の生徒会選挙に出ようと思ってるんだけど、推薦演説者として一緒に登壇してくれない？」

一磨「え、俺が……？」

雅也「純粹にかつちゃんから見た俺をPRしてくれたら良いの。当然練習だって一緒にするから」

一磨「……」

雅也「お願い。俺、本気で生徒会選挙に出たいの」

一磨「……分かった」

雅也「かつちゃん……」

一磨「木内の頼み事だもん。頑張って推薦演説用の原稿考える」

雅也「かつちゃん、ありがとう！」

一磨「頑張って当選しよう」

雅也「うん！ よろしくお願いします！」

握手を交わす雅也と一磨。

7 同・和室（数日後）

学校祭の日。茶道部の生徒からお茶を
をもらう雅也——頭を下げ、茶碗をも
っってお茶を飲む。

N 「二学期に入ってすぐ、学校祭が行われま
した。一日目は文化祭です」

8 同・体育館

優奈、寧々、一組の生徒、四組の生徒
が舞台上で寸劇を披露している。裏方
でマイクを持ち、影アナをしている雅
也。

N 「悪戦苦闘していたPR委員会の発表も、
何とか形になって、無事に本番を終えるこ
とができました」

9 同・運動場（翌日）

学校祭の日。テントが立てられており、

競技が行われている。

賢哉がハンドボールを投げている――
応援席で応援をしている雅也、悠喜、
壮吾たち。

N 「二日目は体育祭が行われ、かどけんをはじめ運動に自信のある生徒にとっては本領を發揮する機会となりました」

10 同・調理室

雅也、真弓、他学校祭の実行委員会の生徒たちが揃っており、机上にはお菓子とジュースが並べられている。

N 「学校祭の実行委員会も滞りなく終了し、打ち上げの時間もあっという間でした」

11 木内家・雅也の部屋（夜）

画用紙に自分の名前を書き、『生徒会会計立候補者』と書き、色ペンで周囲を装飾している雅也。

N 「学校祭がひと段落したのも束の間。とう

とう、生徒会役員選挙が、間近に迫っていました」

12 中央高校・全景

N 「その一方で間もなく後期に入るにあたり、クラスでは後期の係決めが行われていました」

13 同・S R 2 教室

西澤が、係の役職を黒板に書いている——雅也を始め、生徒たちがその様子を見ている。

西澤 「じゃあまずは、学級代表を決めたいと思います。できれば学級代表は、推薦者はなしにして立候補で決めたい」

沈黙の一同。

優菜 「（挙手をして）はい、私女子学級代表やります」

西澤 「他に立候補者はいないか？ じゃあ、女子学級代表は杉山さんに決定」

拍手をする一同。

西澤「男子は、誰かいないか？」

沈黙している男子たち。

ひそひそ話をする賢哉と悠喜。

悠喜「誰かいないか？」

賢哉「さあ」

と、壮吾が隣の席である雅也に、

壮吾「（小声で）うっちー、どう？」

雅也「（小声で）俺、何で？」

壮吾「生徒会との二本柱でやるのも良いんじ

やない？」

雅也「そう言われるとな……」

壮吾「うっちー、リーダー向いてると思うよ。

去年の学級代表代理の時から思ってた」

雅也「……。（と一瞬ためらうが、挙手をし
て）はい、学級代表やります」

男子生徒たち「おお！」

西澤「よし、じゃあ男子学級代表は木内君に

決定」

拍手をする一同。

優菜「（前の席の雅也に）うちーだったら、

私も心強いわ」

雅也「俺も、優菜だったら安心だわ」

微笑み合う雅也と優菜。

14 同・生徒会室

雅也が書類を持って入ってくる。

雅也「失礼します」

井深が迎える。

井深「どうした、木内」

雅也「生徒会の立候補届を出しに来ました」

井深、雅也から書類を受け取り、

井深「はい、確かに預かりました」

雅也「立候補、今どんな感じですか？」

井深「木内は会計に立候補するんだな。会計

だと、木内入れて三人が立候補してるから

投票で票数の多い二人が残ることになるな」

雅也「三分の二ってことですね……」

井深「まあ、投票するのは生徒たちだから、

俺たち教員がどうこう言えることじゃない

けどな」

雅也「はい……」

井深「ま、自信持って頑張りな。弱くしてる
と頼りないと思われて、票数少なるかもし
れないからな」

雅也「そうですよね……頑張ってみます」

井深「うん。俺たちは応援することしかでき
ないからな。頑張ってる姿を見せれば、ち
やんと票は入れてくれる。協力者を増やす
んだ」

雅也「はい！」

15 同・S R 2 教室

雅也が戻ってくる——優菜が日直日誌
を書いている。

雅也「あれ、まだいたの」

優菜「うん。日直日誌書いてた」

雅也「そっか」

優菜「ねえ、どうして学級代表立候補した
の？」

雅也「何となく。ちよっとやってみたいなと
思ってたさ」

優菜「代理やった時に、もう懲りたって言う
てたんじゃなかったの？ 寧々から聞いた
よ」

雅也「まあね。でも、学校祭の実行委員やっ
たり、今回の生徒会の立候補もそうだけど、
俺、多分学校好きなんだろうな。だから、
こういうリーダー的な役回りが来ても、つ
い自分から手を挙げちゃうの」

優菜「大したメンタルもってるね、うちちー
は」

雅也「優菜こそ、どうして手上げたの？」

優菜「交代制にしたから、私たち」

雅也「交代制？」

優菜「うん。二年生になってから、女子が一
人減って六人になったでしょ。だから、一
年から三年の前期後期合わせたら、六回学
級代表をやる機会があるんだったら、ちょ
うど一人一回やったら、みんな学級代表を

やって卒業できるからって」

雅也「すげえな。誰がそんなこと提案したの？」

優菜「寧々だよ」

雅也「濱口の言いそうなことだね。でも、それなら平等があって良いだろうね」

優菜「男子はどうなの？」

雅也「ローテーションなんてあるわけないでしょ」

優菜「じゃあ、来年うちーがまたやる可能性もあるわけだ」

雅也「まあ、ゼロとは言い切れないよね」

優菜「もし、来年の前期も学級代表をやることになったら、うちー通算一年やることになるよね」

雅也「このクラスだから、そうなくても俺は別に気にしないけどね」

優菜「さすがは二組のママだ。尊敬するわ」

雅也「そのママっていうのやめない？ 濱口も最近そうやって言ってるじゃん」

優菜「だって、存在がママだもん。生徒会選

挙も、頑張ってるよ。私、応援してるから」

雅也「ありがとう」

優菜「うちーなら、他のクラスとも接点あるし、何よりPR委員会で一組と四組に名前を轟かせたんだもの、がっばり票は稼げるんじゃない」

雅也「どうだろうねえ。かえって俺自身の評判を落としてるかもしれない。油断はできないよ。気を抜いたら負けちゃうかもしれないし」

優菜「対策は徹底的にしないとね」

雅也「うん…：情報処理検定一級の受験も今週末だし、生徒会選挙もその週明け。なかなか落ち着かないね」

優菜「無理だけはしないでね。うちー自身が倒れちゃったら、元も子もないんだから」

雅也「分かってる。（と荷物をまとめると）

じゃ、部活行ってきます」

優菜「いってらしゃーい」

と、手を振って見送る。

16 木内家・全景（夜）

17 同・雅也の部屋

雅也が原稿用紙に挨拶文を書いている。

雅也「（書きながら）生徒会会計に立候補しました二年二組の木内雅也と言います。僕は、生徒会役員になったら、ごみ拾い活動や挨拶運動等、学校生活において根本的に重要な活動に力を入れていきたいと思えます。（とペンを止めて）うーん、何か違うな」

と、賢哉から着信がかかってくる。

雅也「（電話に出て）もしもし、かどけん。

どうしたの？」

賢哉の声「今、何やってた？」

雅也「今？ 生徒会選挙の時の演説原稿書いてた」

賢哉の声「そっか」

雅也「どうしたの？ 何かあった？」

18 門野家・賢哉の部屋

賢哉が携帯電話で話している。

賢哉「（陰しい顔で）……」

雅也の声「かどけん？」

賢哉「きのしゅんが、学校辞めた」

19 木内家・雅也の部屋

雅也「え……」

賢哉の声「新しいクラスでも、やっぱり上手

くいかなかったみたいだ」

雅也「そんな……」

賢哉の声「何の相談もなしに、あいつは……」

落胆している雅也。

N「思いがけない、きのしゅん退学の報告で
した」

つづく